卒業生に聞く。

連載第三回

二〇〇三年 美術学部先端芸術表現科卒業

今日マチ子

「自前のメディアで作品を発表 七年以上続く「センネン画報」」

一期生としてみんなで学科をつくっていった

私は、先端芸術表現科の第一期生になります。

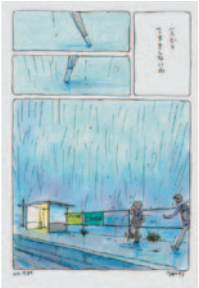
もともとイラストを描くのが好きだったのですが、職業にするのは難しいかな、と考え最初は建築科入学を目指して受験勉強をしていました。父が建築の仕事をしていたので、幼少期から建築雑誌を読んだり、建物を見るのが好きだったこともあります。ところが、受験の直前になり、東京藝大の美術学部に先端芸術表現科という学科が新設されることが発表され、既存の学科の枠にとらわれずに、建築以外の勉強も幅広くできるかもしれないと思い、建築科の試験を受験した後、先端芸術表現科の学生として入学しました。

演劇評論がご専門の長谷部浩先生のゼミに入ったのですが、学科が動き出したばかりの状況下で、当時は先端芸術表現科の教員の方全員が自分たちの先生という感じでした。学生は三十人ほどで、当然先輩も後輩もいません。そんな状況の中、みんなで学科をつくっていくような雰囲気でしたね。まるで兄弟のように、けんかはするし、言いたいことも言い合えて、それぞれが個性を発揮できる関係だったと思います。先端芸術表現科はキャンパスが茨城県取手市にあるため、学生は取手の近辺に下宿している人が多く、授業の後や、課題を制作する時など、誰かの家に集まって制作することがよくありましたね。

自分のメディアで描いたものを発信していく

学生時代の経験で今につながっていることといえば、自分でミニコミを発行して、流通に乗せ、Webにも載せるという作業をしていたことでしょうか。新しいメディアをつくり、作品を発表するというスタイルですね。漫画を描きあげても、いきなり大きな雑誌に載せることはハードルが高い。自分が描きたいものを描くだけではなく、なおかつ読者に届くまでがひとつの作品だと思ってやっていました。今でも自分が最後までコントロールできるメディアを持っていたいという気持ちがあり、Web上での連載を長い間続けているのです。

一方、メディアの形に合わせて自分が何をつくることができるのか、について考えることも好きなので、いわゆるメジャー誌で描くこともおもしろいです。そういうメディアでは、より多くの人に届くような表現



右：『センネン画報』（太田出版）
左：「今日マチ子のセンネン画報」より
http://juicyfruit.exblog.jp/

や、普遍性をもった表現を心がけています。またアートに理解がある雑誌や媒体でしたら、思いきり実験的なことをして、読者を喜ばせたいという気持ちもあります。

七年以上Ｗｅｂ上で連載を続けている「センネン画報」は、新しいテクニックや新しい描き方を開発していくような場所で、それを自分だけのものにしないで、読者の方にも見ていただいている、ということになりますね。ミニコミを出していた時は、取材をした事実を描くというスタイルでしたが、何か自分の物語のようなものを描いてみたい、という思いが少しずつ湧いてきて、今では一作ごとのストーリーを描きたいと思えるようになりました。

学生だからできる人との出会い

大学生活の四年間は本当にあっという間です。

私自身、一年生の時には、自分のテーマが見つからないという状態で、ただ課題をこなしているうちに二年生になってしまったのです。そのことを長谷部先生に相談したところ、私が無駄に感じていた長い通学時間を利用して何か描いてみたら、とおっしゃっていただき、それにピンときて電車の中で絵を描き始めるようになりました。ですので、先生にはとても感謝しています。

学生のうちに、学内外を問わず、いろいろな人と会ったり、教えを請うことはよいことだと思います。私も藝大在学中に、興味のあるアーティストにメールを出してみたり、会ったりしたことがあるのですが、社会人になると、なかなかそういうことができなくなります。藝大の学生だといえば相手の方も安心しますし、芸術家を志していることをすぐに理解してもらえます。そういう特権は大いに利用して、積極的に世界を広げてほしいですね。

ジャンルというものは自分でつくり出していくものだと思います。それを自分の中で熟成させてつくっていくことはできるかもしれませんが、それよりも、外に刺激を求めて新しいことを見い出すほうがより早いのではないでしょうか。それにより、社会性も育むことができます。なかには受験の時の絵が一番うまくて、そこで止まってしまう人もいますが、そういうことはもったいないな、と思います。

卒業した今、思うことは、藝大の講義はとても魅力的なものが多かったということです。ですので、在校生の皆さんには、そのありがたさを十分に感じてほしいと思っています。また、卒業生の立場でいえば、例えば、卒業生が気軽に参加できるような講座があると嬉しいですね。また、卒業生と在校生がコミュニケーションできる機会があれば、在校生の皆さんが将来のことを具体的に考えるきっかけになりますから、そういう場があるといいな、と思いますね。

きょう・まちこ
漫画家。1980年、東京都生まれ。女子学院中学校・高等学校を経て、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科、セツ・モードセミナー卒業。2000年～2004年にミニコミ誌「Juicy Fruits」を発行。2004年よりブログ「今日マチ子のセンネン画報」を更新。2005年「ほぼ日マンガ大賞」入賞、2006年、2007年、2010年文化庁メディア芸術祭マンガ部門で「審査委員会推薦作品」に選出。著書に『センネン画報』『セキ☆ララ中学受験』『みかこさん』『100番めの羊』『七夕委員　星に願いを篇』『cocoon』『かことみらい』『炭酸水の底』ほかがある。

 photo: Hiroaki Horiguchi